

夜の歓楽街に向かつて、私は駆けていた。腕時計を見ると待ち合わせ時間ギリギリ。もうあちらは着いているだろうか？

華の金曜日だからか、遅い時間帯にも関わらず、道は人でごった返している。客引きに捕まらないよう小走りで男を探す。

いた。

シャッターが降りた店の前で、重たい髪を無造作に結んだ男が、無精髭を撫でながら待っていた。

群衆の中で、頭ひとつ抜ける高い背に、服の上からでも分かるがっしりとした体。シワの深い顔と鋭い鼻筋は威圧感があるが、とろんとした甘いタレ目が男の顔に優しさと色気を与えていた。

相変わらず立っているだけで様になっている。この様になっている男が、私の待ち合わせ相手であり、体を前提とした友達、所謂セックスフレンド（セフ

レ、のヤオさんだ。

今からあの人に話しかけるのか。

毎度のことだが、華のある立ち姿に私は少し気後れした。

私が逡巡している間に、ヤオさんは逆ナンされている。

軽くあしらっているようだが、相手はかなりの美人だ。連絡先だけでも聞いとけばいいのに。

じつと見つめていると、逆ナンに対応していたヤオさんは、何かに気づいたようにぱっと、顔を上げこちらを見た。遠目で見ていたのがバレたようだ。

「カナちゃん、着いてたなら声掛けてよ」

「あゝ遅れて本当にすいません。ちよつと話しかけるのに気後れしてしまつて」
「なんだそれ」

くしゃりと笑った顔は、私よりずっと年上なのにかわいい。

かつこいいのに愛嬌もあるよな〜と思いながら、背伸びして男の耳に口を寄せる。

「じゃヤオさん、ホテル行きますか」

「うん」

サラリと返事をしたヤオさんの耳が、少しだけ赤くなっていて、やっぱり可愛いなと思った。

薄暗い室内で、お互いの体だけがぼんやりと見える。一定の速度で激しい破裂音がなり、それに合わせてヤオさんの野太い喘ぎ声が漏れた。

グロテスクな極太ペニスバンドが、耕されたヤオさんの中から出たり入ったりして、イイ所を掠める度に、ヤオさんは私に必死に縋り付いてくる。

ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅッ♡

「うっおっおっおっ♡おっ♡そこっ……♡きもちっいいッ♡うっうっ♡すきっ♡おっ♡おっ♡あっ♡すきい♡♡」

「正面でぎゅっうってしながら犯されるの好きですか？」

「おっすきっ♡ぎゅっうってしながら犯されるのお♡すきっ……♡あっあっあっあっすきもちっ♡♡♡」

返事とともに、背に回されたヤオさんの腕に力が入った。骨がきしんでちよつと痛い。

「力入りすぎてて動けませんよ」

「おっごめっ♡これっすごい気持ちくてえ♡力入っちゃうっ♡ごめっつきもちっすきい♡♡」

しょうがないのでペニスバンドを中から引き出さずに奥をノックするように

腰を進める。

ぐっ
ぐっ
ぐっ
ぐっ
ぐっ
ぐっ
ぐっ
ぐっ
♡

「お♡おっおっおっおっおっおぐっだめっそれえ……♡つよいつおつきもちっ
ぎもちっ♡♡♡」

「ヤオさんが離してくれないのが悪いんですよ」

「ごめなさっ っ♡♡ごめんなさっ っ♡♡おぐっ きもちっ っ♡♡すき♡あっあっ
おっおっおっ きもちっ♡」

謝りながらも縋り付く力は全く弱まらない。大きな雄っぱいがブルンブルンと目の前で揺れる様は眼福だが、このままでは私の骨が限界を迎えてしまう。

イかせちやった方が力抜いてくれるかな？

「ヤオさんの奥、今からガツツリ犯しますね」

「えっ？おツツツツツ……♡」

どちゅんッ♡

軽く宣言した私に、困惑しているヤオさんを見無視して、奥を思い切り突いた。体重を載せてきゅう♡きゅう♡と収縮している中を圧迫する。

ぐっぐっぐっぐっぐっぐっ♡

「おっ~~~~♡待ってっ♡おぐっおぐの壁っ叩かれてるっ♡だめえっ♡
そこおだめえええ♡♡♡」

「ヤオさんほらぎゅーって中締めて」

「むりっっ♡おっおっおっ今締めたらっおかしくっ……♡おかしくなるから♡
おあああむりっ♡♡」

ヤオさんはいいやいやと長い髪を振り乱している。

「できるよ」

私は宥めるようにヤオさんに深くキスをした。

至近距離で目が見開かれる。甘やかすように舌を絡めると、その目はすぐにとろん♡と溶けた。

「んっふっふ……♡んんっあ……♡」

「ほらしてぎゅっって中締めて、いっぱい気持ちよくなれるから」

耳元で優しく囁く。ヤオさんが震えながらも小さく頷いたのが見えた。

「はっはっはっはっ……♡ぎゅっっ♡♡♡……おおっ♡ああっ♡あああああ
あ〜♡♡♡まっでえ♡これえやばいっ♡♡♡♡♡」

ぶるぶるぶるツツ♡♡

ヤオさんの脚が激しく痙攣し、体が仰け反る。

きつく締め付けているのがペニスバンドを通して伝わった。

「そのまま締め付けてて」

ぐりイ♡ぐりぐりぐりぐりぐりぐり♡♡

締め付けて、きつくなつた中を無理やり拓く。奥の行き止まりをねっとり突いていじめるとヤオさんの脚が逃げるように、シーツを蹴った。

「おツツ♡これ、ほんとにつ、だめつつ♡だめつつ♡許して♡これっ頭おかしくなる♡おっおぐの壁押されて♡行き止まりぐりぐりつつ……♡氣やっちゃ♡だめえ……♡♡」

「逃げないでくださいね」

ぐりッ♡ぐりぐりぐりぐり♡

腰の引けてるヤオさんを追い詰めるように体を密着させる。

「おお~~~~♡♡こわいつ♡これ、気持ちよすぎてっおぐっごわい♡こわいから♡カナちやつ♡だめえ♡」

「ほら、怖いならちゅーしましょっか」

「あっん♡♡ふうん♡ふうふう♡♡」

口を開かせ、舌を絡めて吸い取ると腰を引いて必死に逃げようとしていたヤオさんは、デロデロと破顔した。

ちゅーしたらヤオさんは大抵の事を許してくれる。

「大丈夫ですよねヤオさんなら」

「うっあっわかった♡大丈夫、大丈夫だから♡あっあっあっぎゅっして♡」
なおも怖がるヤオさんを強く抱き締めて、腰を強く突き出す。

ごちゅっ♡♡♡

「^ごおおっお~~~~~ばぐっ♡イグッイグッイグッおぐっおぐのお深いところで
イグウッ♡♡♡」

びゅう。粘度の薄い精子が力なく吐き出された。力強く縋っていたヤオさんの体がだらりと弛緩する。どうやら気絶したらしい。

ゆっくりとヤオさんの中からグロテスクなペニスバンドを抜き取る。

「うっ、あっ、あ、あ♡」

気絶しながらも、細い喘ぎ声がヤオさんから漏れた。えろい。

しかし、これ以上の無理は流石にさせられない。

気絶したヤオさんを前に、後処理の面倒さに憂鬱になりながらも、とりあえずバンドを外してシャワーに向かった。

1人で熱いシャワーを浴びていると、ガタガタつと、遠くで物音がした。もう起きたのだろうか？はやいな。

足音が近づく。浴室の入口にぬっと長い影が伸びて、扉が開かれた。

「プレイバシーとかないんですか？」

「今更でしょ。おじさんにあんだけ無理させおいて、放置するなんて酷いねえ、

置いていかれたのかと思った」

冗談めかして眉を下げるヤオさんにお湯をかける。

「違いますよ、自分を綺麗にしてからヤオさんも綺麗にしようと思っただけで……一緒に入ります?」

「うん」

あれだけ乱れて、気絶までしたのに、ヤオさんはもう普段通りの男前に戻っている。いや、少し普段よりも気だるげかな?

湯気がこもる浴室のなか、2人で体を寄せた。

眼前にブルンッと立派な胸筋が迫る。雄っぱいがデカイな……。ぼんやりした頭でしみじみ思う。

「予定が……なんだよね……ねえ次はいつ会える?」
「え?」

ヤオさんに上から見下ろされていた。雄っぱいに見とれていて、全然話を聞いてなかった。

「だから、次、いつ会えるかなって」

「あっあゝ次ですか、つぎ、次は、ちゃんと手帳見なきゃわかんないんですけど」

「来週の土曜日は？」

来週、来週の土曜日か……その日は別のセフレと約束してるんだよね」

「土曜日はちよつと、予定あつて……」

ふっ。とヤオさんの目が細められて暗くなった。

「そう。」

「あつても、」

「いやいいよ。じゃあ次会える時呼んで」

ガツンと刃を入れるように、話が遮られる。笑うヤオさんの顔には謎の圧があった。

なんか怒ってる？よく分からないが怖い。

とりあえず私は、ヤオさんの首に腕を絡めてちゅうと唇を吸いとった。

「んっんっふっう……♡んううっ♡」

「んっちゅ」

ヤオさんの足がカクカク震える。

私はとろりと垂れた唾液を舐め取り、顔を離した。

「はあっはあっ……♡カナちゃん、ちゅーすればいいと思ってない？」

「思ってないですよ？」

ちゅっちゅっとう優しくキスを送りながら、ヤオさんの立派な雄っぱいを揉む。ハリのある胸が私の手を押し返してくる。

柔らかいのには弾力があるなんて高反発枕みたいだ。

「ッああッまだやるの？」

「ちよつとだけ、ヤオさんの雄っぱいがえっちだったの。今日はあんまり雄っぱい触れてなかったですしね」

「はっ、あっうっ変態くさいっ」

口では嫌がつているが、胸をぐいっとな押し付けてくる。体は正直というやつだ。いやこれこそ変態くさいか？

どうでもいいことを頭から追い出して、私は、ヤオさんの雄っぱいにかぶりついた。

「んっあッ……♡」

頭上から甘い喘ぎ声が漏れて、水音にかき消される。

その後、浴室で中々盛り上がってしまい、ホテルの延長料金がかさんだ。

週は変わり、土曜日。

「めっちゃ良かった」

メロメロとしなだれかかってくるセフレに、私は曖昧な笑みを返す。

今日は、マツチングアプリで出会ったセフレを抱いたのだが、私は正直、あんまり満足できなかった。

相手の人はかなりご満悦で、それは何よりなのだが……。今日のプレイは、終始相手に気を使う場面が多くて、欲の発散より、疲れの方が来てしまった。

セフレがシャワーを浴びている間に、発散できなかった欲が腹の中でふつつと再燃してくるのを感じる。

あゝ物足りない。なんととはなしにスマホを触っていると、メッセージの欄に

「ヤオさん」の文字。

……ヤオさん、呼んだら来てくれるかな。

無精髭のおじさんがくしやりと笑う姿が浮かんた。

この前は、予定があるからと誘いを断ってしまったが、ダメ元で今から連絡してみようか。

嫌だったら断るだろうし。

「決めた」

連絡しちやおう。とりあえず、セフレがシャワーから上がるまでは待つけど。しばらくして、シャワーを終えたセフレに、もう1ラウンド誘われたが、断った。

そして、自分の分のホテル代を渡してから、私はヤオさんにメッセージを送った。